

障害者に対する学生の意識の変化についての考察

ーわかふじアミィの活動からー

海老名和子

I はじめに

平成15年11月8～10日にかけて第3回全国障害者スポーツ大会(以下「わかふじ大会」)が静岡県で行われた。この大会は、多くのボランティアが関わって大会運営を支えた。平成13年度に県からの要請を受けて本学の学生が、わかふじ大会を支える学生ボランティア(以下「わかふじアミィ」)として全学体制でわかふじ大会に参加・協力することになった。わかふじ大会の時期は、歯科衛生学科の2年生が、臨床実習中で大変忙しい時期である。しかし学生が、大会に協力し多くの障害者と関わる障害者スポーツ大会は、学生にとって貴重な体験になるはずであると考えた。そして歯科衛生学科1,2年生全員が参加することになった。このわかふじアミィは、選手団と行動を共にしてサポートする選手団担当と競技に関して選手のサポートを行う競技担当に分かれていて、歯科衛生学科の学生は、2年生の大変さを考慮して競技担当をやることになった。そして平成14年度からわかふじアミィ養成講座カリキュラムにのっとり手話の講義(実習)が開催された。このわかふじアミィの選手団担当は、5人1グループで1,2年生混合のグループを16グループに分けそのうち誘導係、表彰係、解散係と役割分担した。各グループには、2年生のリーダーを配置した。(2年生のリーダー長は、看護、社会福祉専攻、介護福祉専攻の学生リーダーとわかふじ担当教員(私)と5人で他のアミィ養成校の代表者らと高知の第2回障害者スポーツ大会を視察した。)

またグループリーダーは、2回のリーダー研修会に参加した。選手団担当の若藤アミィである歯科衛生学科の学生は、本大会に先立って行われたリハーサル大会にも参加した。わかふじ大会担当教員として14年度から関わり、第2回全国障害者スポーツ大会(高知大会)に視察に行き始めて障害者スポーツを間近で見る機会を得た。筆者は、障害者がひたむきに頑張っている姿を見て大きな感動を覚えた。学生は、今までに障害者と接する機会は少ないはずであり障害者に対するイメージも暗いものではないかと予測した。それが、大会に参加協力することで障害者を理解し、障害者に対する意識に変化が出ると考えた。さらに学生ボランティアの意識が大会前後での差異について探求することとした。本研究の第1段階のわかふじ大会リハーサル大会前の学生へのアンケート調査については、平成15年度静岡県立大学短期大学部研究紀要に「短大生のボランティア意識についての研究(第1報)」を掲載した。今回の報告書では、大会終了後のアンケート調査の結果がまとまったのでそれを報告する。

II 方法

無記名の選択、記述方式によるアンケート調査の実施。

実施時期：平成15年12月

対象者：歯科衛生学科1年生、36名、2年生39名で合計75名。(回収率96.2%)

内訳は、誘導係…1年生 22名、2年生 25名、表彰係…1年生 11名、2年生 9名、解散係…1年生 3名、2年生 5名となっている。

アンケート項目は、わかふじ大会について、わかふじアミィの活動について、わかふじアミィの活動での満足度についてである。

Ⅲ 結果

わかふじ大会にわかふじアミィとして参加協力したことに関しては、「良かった」、「どちらかといえば良かった」と回答した学生が1年生 83.4%、2年生が 92.3%であった(表1参照)。そして選手についての感想は、最も多かったのが1年生では、「努力している」が 58.3%であり、次いで「明るい」が 52.8%であった。それに比べ2年生で多かったのは、「明るい」74.4%、「頑張っている姿に感動した」69.2%であった。また「ボランティアの必要性を感じた」については、1年生 5.6%、2年生 20.5%と差が現れた(表2参照)。

わかふじ大会が、「良い大会であった」と回答したのが1年生 50.0%、2年生 76.9%と多く「まあ良い大会であった」も入れると1年生 77.8%、2年生 97.4%の学生がほぼ良い大会であったと感じている。大会のイメージとしては、1年生より2年生の方が良い印象を持っていることがわかった(表3参照)。また大会参加者、協力者については、「多くの人の協力に驚いた」学生が最も多く1年生 69.4%、2年生 82.1%であった。それに反して観客については、「もっと多くの人に応援に来て欲しかった」という回答が1年生 55.6%、2年生 38.5%であった(表4参照)。

表1アミィとしての参加協力について

	1年生	2年生
良かった	41.7	53.8
どちらかといえば良かった	41.7	38.5
普通	5.6	7.7
どちらかといえば良くなかった	2.8	0.0
良くなかった	2.8	0.0
無回答	5.6	0.0

表2選手についてどう思ったか (%)

	1年生	2年生
明るい	52.8	74.4
努力している	58.3	46.2
前向き	36.1	48.7
大変そう	8.3	2.6
前向きですごいと思った	33.3	33.3
がんばっている姿に感動	44.4	69.2
暗い障害者のイメージが変わった	30.6	17.9
多くの障害があることがわかった	27.8	23.1
ボランティアの必要性を感じた	5.6	20.5
その他	2.8	5.1

表3わかふじ大会のイメージ (%)

	1年生	2年生
良い大会であった	50.0	76.9
まあ良い大会だった	27.8	20.5
普通	19.4	2.6
あまり良くない大会だった	2.8	0.0
良くない大会だった	0.0	0.0

表4大会協力者参加者等について (%)

	1年生	2年生
多くの人の協力を驚いた	69.4	82.1
協力者が少ないと思った	0.0	0.0
多くの人が競技に参加して良かった	19.4	38.5
選手の数が少ない	2.8	0.0
観客が多く良かった	0.0	2.6
もっと多くの人が応援に来てほしかった	55.6	38.5
ボランティアの必要性がわかった	36.1	38.5
ボランティアは少なくて良かった	8.3	2.6

わかふじアミィの活動については、1，2年生で違いが見られた。障害者との関わりについては、障害者と「たくさん話げできた」もしくは「少し話げできた」と回答した学生が、2年生は79.4%であるのに比べ1年生は36.2%と少なく「話げあまりできなかった」、「話げできなかった」と回答した学生が逆に58.3%と多かつた（表5参照）。

わかふじアミィの業務については、2年生は53.8%が「しかりできた」と答えており1年生に比べて高くなつてゐる（表6参照）。わかふじアミィの業務量については、全体として「普通」の回答が最も多かつた。ある程度大変であろうと考えていたと思われるが、2年生の中で最も多かつたのは「少し大変だつた」で41.0%だつた（表7参照）。またわかふじアミィは、県職員で構成されていた実施本部員の基で指示を受け活動することになつてゐた。そこで実施本部員の指示に迅速に応じることができたかの質問をしたところ「できた」と回答したのが1年生86.1%、2年生82.1%と大多数の学生ができてゐた（表8参照）。またわかふじアミィの業務の楽しさについては、「まあ楽しかつた」と回答した学生が、全体としては最も多かつた。そして「楽しかつた」と回答したのが1年生19.4%に比べ2年生は41.0%とかなり多くなつてゐる（表9参照）。

またわかふじアミィの業務については、選手団担当、競技担当でも誘導、表彰、解散と係がそれぞれ分かれてゐたが、自分の業務以外のことをしたかつたかの問に対しては、それほど大きな差は出ず「どちらともいえない」と回答した学生が1，2年生とも多い結果となつた（表10参照）。

表5わかふじアミの活動について

(%)

	1年生	2年生
たくさん話げた	5.6	25.6
少し話げた	30.6	53.8
普通	5.6	12.8
あまり話げなかつた	25.0	7.7
話げなかつた	33.3	0.0

表6アミの業務について

(%)

	1年生	2年生
仕事はしっかりげ	38.9	53.8
まあまあげ	38.9	41.0
普通	19.4	5.1
あまりげなかつた	2.8	0.0
げなかつた	0.0	0.0

表7アミの業務量について

(%)

	1年生	2年生
大変だつた	5.6	12.8
少し大変だつた	19.4	41.0
普通	47.2	30.8
それほど大変でなかつた	22.2	12.8
大変でなかつた	5.6	2.6

表8実施本部員の指示に迅速にげることが出来たか (%)

	1年生	2年生
げ	86.1	82.1
げない	0.0	0.0
何ともげえない	13.9	15.4
無回答	0.0	2.5

表9アミの業務の楽しさについて

(%)

	1年生	2年生
楽しかつた	19.4	41.0
まあ楽しかつた	52.8	46.2
普通	16.7	10.3
あまり楽しくなかつた	5.6	0.0
楽しくなかつた	5.6	0.0
無回答	0.0	2.6

表10自分の業務以外のことをしたかったか (%)

	1年生	2年生
はい	30.6	35.9
いいえ	22.2	28.2
どちらともいえない	44.5	35.9
無回答	2.7	0.0

次にわかふじアミィの満足度の項目についての結果であるが、まずわかふじアミィのやりがいについては、全体としては「少しやりがいを感じた」と回答した学生が多く「やりがいを感じた」「少しやりがいを感じた」の回答者は、1年生 69.5%、2年生 89.8%であった。ただ1年生の 16.7%は「あまり感じなかった」「感じなかった」と回答している。またわかふじ大会に期待したことは達成したかの質問に対して、1, 2年生で違いが出ていて「達成した」との回答が2年生は 33.3%いるのに対し1年生は 5.8%であった。「少し達成した」を含めると1年生 30.6%で2年生 51.2%であった(表 12 参照)。次に障害者を理解できたかの質問に対しては、全体では「少しできた」という回答が最も多く「できた」「少しできた」と回答したのが1年生 83.3%、2年生 79.4%であった(表 13 参照)。また普段はなかなか時間がなくて1, 2年生の交流が持てないのが実情である。しかし今回の活動を通して1, 2年生の交流については、「できた」「少しできた」と回答したのが、1年生 77.7%、2年生 89.7%と大半の学生が1, 2年の交流ができたと回答している(表 14 参照)。また今後の障害者ボランティア活動については、より積極的な回答である「是非したい」と回答したのは1年生 2.8%、2年生 5.1%であった。最も多かったのは、「機会があればしたい」で1年生 55.6%、2年生 56.4%で興味がないというわけではないことがわかった(表 15 参照)。

表11アミィのやりがいについて (%)

	1年生	2年生
やりがいを多く感じた	27.8	46.2
少しやりがいを感じた	41.7	43.6
普通	13.9	7.7
あまり感じなかった	11.1	2.6
感じなかった	5.6	0.0

表12わかふじ大会に期待したことは達成したか (%)

	1年生	2年生
達成した	5.6	33.3
少し達成した	25.0	17.9
普通	38.9	41.0
あまり達成しなかった	5.6	2.6
達成しなかった	16.7	2.6
無回答	8.3	2.6

表13障害者を理解できましたか (%)

	1年生	2年生
できた	8.3	17.9
少しできた	75.0	61.5
普通	11.1	15.4
あまりできなかった	2.8	5.1
できなかった	2.8	0.0

表14 1, 2年生の交流はできたか (%)

	1年生	2年生
できた	44.4	35.9
少しできた	33.3	53.8
普通	8.3	10.3
あまりできなかった	11.1	0.0
できなかった	2.8	0.0

表15障害者ボランティア活動について (%)

	1年生	2年生
是非したい	2.8	5.1
機会があればしたい	55.6	56.4
いわれればしたい	25.0	33.3
あまりしたくない	13.9	2.6
したくない	2.8	0.0
無回答	0.0	2.6

IV考察

「ボランティア」は、本来「自発性」、「公共性」、「無償性」といった特徴のものである。

(1) その点からすると本学の学生が参加協力したわかふじアミィは、学校として学生がやるべきものとして学生に選択の余地を与えていないのであるから、ボランティア本来の意味からはずれるのかもしれない。しかし今回のわかふじアミィの参加要請は、医療、福祉を学ぶ学生にとって何事にも代え難い貴重な経験になることと考えた。学生は、今までに障害者と接した経験は少なく障害者というと暗いと言うようなイメージを持っていた。また接した経験が少ないために障害者というものをどの様に捉えて良いか分からなかった。

(2) しかしわかふじ大会終了後のアンケート結果から障害者に対して好意的なイメージを持つことが出来た。わかふじアミィとして関わったわかふじ大会について、大半の学生が非常に良い大会であったと考えている。またわかふじアミィとして参加協力したことに関しても良かったと好意的に思っていることが分かった。そして障害を持っている選手に対して「明るい」「前向き」という感想を持った学生が大半で、選手の活躍に対しても「前向き

ですごい」、「選手の頑張っている姿に感動した」と好意的に捉えている。

またわかふじアミィの活動については、1年生に比べて2年生の方が積極的に活動したのではないかと考えられる。これは2年生で、少し大変だったと回答した学生が多かったにもかかわらず障害者と話ができたり楽しかったと回答している学生が1年生と比べて多いことから考えられる。

そしてわかふじアミィとしてわかふじ大会に参加・協力したことの満足度については、大半の学生が、ある程度やりがいを感じたことが分かった。また大会前のアンケートでは、障害者を理解することを期待した学生が多かったが大半の学生が少なからず出来たと回答していて参加することの目標はほぼ達成したといえるのではないかと考える。また1, 2年生間の交流については、普段はなかなかもてない現状であるが、今回の活動を通して先輩、後輩としての交流ができた学生が多かったのは、担当教員として嬉しいことである。今回の障害者スポーツ大会であるわかふじ大会にわかふじアミィとして参加・協力したことは、学生にとって大変であったことは事実であるが、学生達にとって障害者の理解を深めることができ、さらに障害者を含めた多くの人々と共に一つの大きな大会運営に関わったことは、多くの学びがあったであろうと考える。青木他は、ハンディキャップを持つ人と直接関われる中で感じとり、実際にお世話や話をする中で得られた大きな学びであるといっている。(3) また今後のボランティア活動については、機会があればやりたいという学生が多かった。しかし授業カリキュラム、社会人となったときには、時間的余裕が取りにくいのが現状ではないかと考える。現在勧めている歯科衛生士養成教育が3年制となれば、ボランティアへの機会も増すのではないだろうか。ボランティアは、「相手の気持ちをくみ取る」、「自分の行動に責任を持つ」「常に周囲の人たちへの配慮を十分に行う」といったことが臨まれている。(4) これは、一般社会人の心構えに通じるものであると共に医療人として将来生きていく学生にとっては、必要不可欠なものである。これを機会に学生の障害者ボランティアへの興味が高まってくれることをさらに期待したい。

V 結論

平成15年度に静岡県で行われたわかふじ大会に本学の学生がわかふじアミィとして活動する貴重な機会を得た。そこでわかふじアミィの活動をとおして障害者に対する学生の意識の変化についてを研究課題として研究してきた。研究の第一段階としてリハーサル大会前にわかふじ大会に類手、障害者についての意識調査を実施した。これは平成15年度本学研究紀要に調査結果をまとめた。そして第二段階としてわかふじ大会終了後にわかふじ大会について、わかふじアミィの活動について、満足度についてのアンケート調査を実施した。

今後は、開始前と終了後についてももう少し分析を深めていきたいと考えている。また誘導係、表彰係、解散係という業務内容の違いにより障害者との関わりの違い、それによる満足度等に因果関係があるのではないかと想像するが、それは今後引き続き分析していき明らかにしたいと考えている。

VI 参考文献

- 1 森 秀樹：「カウンター・カルチャーとしてのボランティア」『大学生とボランティアに関する実証的研究』第2章 p23—98、ミネルヴァ書房、2003

- 2 海老名和子：「短大生のボランティア意識についての研究（第1報）、静岡県立大学短期大学部研究紀要、第17号、2004
- 3 青木壽子他：「ボランティア活動への参加と看護教育」、『看護教育』Vol.40No.4、医学書院、1999
- 4 大橋健一他：「阪神・淡路大震災における大学生のボランティア活動の意識と実態」、『大学生とボランティアに関する実証的研究』第2章 p23—98、ミネルヴァ書房、2003